

なしき思慮分別の當體を直ちに有の原型として握把するデカルト的思考方向の總決算であつて、元來デカルトが我の存在をして論理的必然たらしめた「我思ふ」の事實こそは、もしその思想が人の生活感情に即して語られたとすれば、同一自明の確信を以て、「我思う故に我無し」の歸結となり、傳道者の一切皆空説の如き空觀の立場を表白する語句ともなり得た筈である。

氣息に即して生活を実感する古代人の一般思想は、デカルトの論理的思惟に比較し必ずしも淺薄だといわれず、またその知識が不分明であるともいられない。生きることは事實息をすることである。息の亂れは心の亂れであり、息をととのえることは、心靈をととのえる事でもある。故に呼吸を生命の象徴とする人間觀は、心と肉體とを一體に感知する者に取つては、最も自然的なまた最も明白な人間生存の事實を語るものとなる。固よりこの原始的氣息觀は、その立場の當然の結論としても、今日生理學上規定される單なる呼吸作用とその概念内容を全く同一にするものであるといわれない。呼吸はここに人の生命人の靈魂と一體視されて、人の思想的感情行動の一切をもその中に包む概念となるからである。

聖書の氣息の概念はその語根の意味が既に暗示する如く、一方に於ては風、空氣、空虚の意味を持つと共に、人の呼吸作用も無き偶像の虚無性、その偶像を造り、之を信する者のエホバに對する不信不法、及びその神に背ける者の必ず滅亡に至る宗教道德的虚無性を警告すると共に、他方人の氣息と語根を同じうする神靈の觀念としては、人の氣息的存在をも神の絶對有につながる存在とならしめているばかりでなく、神の有を聖愛と

して説く新約的信仰に立てば、「無きものを有する者の如く呼ぶ愛の神」(ロマ四・一七)の前に、人の空無性は自然に解消されることとなる。従つて傳道之書は一切皆空觀は此の意味に於ては神の愛の氣息を未だ感知し得ざる時代の空觀というべく、あるいは佛教的には、なお有相に止まり、未だ眞の空觀に達せざるものと見る事ができるであらう。

唯識の解釋について

富貴原 章 信

(一)唯識ということは唯識論の隨所に説かれるのであるが、その中とくにまとまつて説かれるのは第七卷(二十六)である。ここには總門と別門との唯識が明かにされているが、まず總門唯識とは唯は境無(非有)、識は識有(非無)、であつて、非有なるものが即非無であるというのが唯識なりといひ、また別門唯識とは一切法を心法、心所法、色法、不相應法、無爲法の五にわかれ、その一々について唯識ということが成立するといふ。(1)心法、八識それ自體であるから、唯識ということが成立し、(2)六位の心所は八識に相應するのであるから、これは心法に比すれば勝れるといえない。故に劣なる心所をかくして勝なる心法において唯識ということは成立し、(3)色法は識所變の影像であるから、實有ではない。實有でなければ唯識ということになるのである。また相分を緣する能縁の見分も相分と共に所變であるから、これを能變の自體分に攝して唯識をたてるので

ある。(4)不相應法は心色の分位に假説されたものであるから、このような假法を攝して實法に従え、もつて唯識というのである。(5)無爲法は眞如で、前の四法(有爲の事相)の實性であるから、事相を攝して理性に歸し、その理性において唯識ということを知るのである。以上は別門の唯識である。

次に唯識述記(一本五左、總料簡章(一本二六右)など)には唯識論所説の唯識ということを四重にまとめる。(a)攝相歸性、有爲の事相(依他)を攝して無爲の理性(圓成)に歸し、もつてこの眞如の理性において唯識を悟入する。これは別門の(5)にあたる。(b)攝境從心、これは十地經所説の三界唯心であり前の別門の中、(1)(2)(3)が含まれる。(c)攝假從實、不相應法は心色の分位に假立されたものであるから、このような假法はすべて實法に従え、その實法において唯識とたてる。これは別門の(4)にあたる。(d)性用別論、心法、色法などの一切法を考えて、それらの假と實とを定めて各別の處におさめる。これは差別門であるが、しかしこの差別といえども、平等を離れた差別ではない。そして平等門の唯識が(a)(b)(c)の三であり、しかもその三においても、假より實へ、境より識へ、有爲より無爲へと唯識が進展することを表し、この平等門といえども、差別に即する平等なることを意味する。そして總料簡章においては(a)の眞如は勝鬘所説の如來藏であるともいうのである。これは注目に値する。これが唯識の四重出體である。そしてこの四重出體は玄奘の八門出體によるのである。このように考えると、或る學者が唯識論所説の唯識は性用別論であるときめているのは、後學をあやましめる短見と云うべきである。

また唯識章(一末初)には、唯識論所説の唯識ということを五重にまとめる。(i)遺虛存實の唯識、外境は無なる遍計所執であるから、これを切り捨て、内識は實なる依他と圓成であるから、これを存し、もつて唯識をたてるのである。これは四重出體の(b)にあたる。ただ相違するところは前は攝(表詮)でありいまは遣(遮詮)という点である。(ii)捨盡留純の唯識、内境(相分)は外境にまぎれる恐れがあるから、これを捨し、純粹なる内識において唯識をたてるのである。これは別門唯識の中、所變の相分を攝するというにあたり、四重出體の(b)を開いて、さらに委しく説いたのである。(iii)攝末歸本の唯識、これは枝末の相分見分を攝し根本の自體分に歸して、もつて唯識をたてるのである。これは別門唯識の中に所變の見分を攝するというにあたり、また四重出體の(b)を開いて、さらに嚴密に唯識をたてるのである。これは所變とならぬ能變の識體、即ち識心の絕對主體において唯識をたてるのである。(iv)隱劣顯勝の唯識、心所は劣、八識の心法は勝である。劣なる心所を隱し勝なる心法において唯識をたてる。これは別門の(2)にあたり、四重出體の(b)を開いて、これを委しく明すのである。(v)遣相證性の唯識、これは別門の(5)にあたり、四重の(1)に一致する。ただ四重と相違するのは攝(肯定)と遣(否定)とである。そしてこれは唯識章において勝鬘の自性清淨心であるといい、また心經幽讚に五重唯識を明す中、第五重は諸經に説かれる一諦、一依、佛性、法身、空、眞如、不二法門、不生不滅などに全同であるともいう。してみると唯識宗をもつて權宗などという説は更に考うべきである。